

# 退職、病気…社会との接点失い

# 都会の片隅で「孤立死」

誰にも気付かれることなく死する「孤立死」。高齢者の単身世帯の増加に伴い、孤立死を生むリスクも高まる。職場を引退して親類、友人とも疎遠になり、いつの間にか都会の片隅で忘れられる……。ある高齢者の死の現場は、問題が多くの人の上に降りかかる可能性があることを改めて教えてくれる。

(玉岡宏隆)

## 高まるリスク 誰にも



孤立死した男性の住居を片付ける遺品整理業者の作業員(都内)

東京都内の住宅街にある古い2階建てアパートの1Kで8月、男性(当時75)が亡くなっているのが見つかった。死後1カ月。異臭に気付いた近所の人の通報が発見のきっかけだった。男性はこの部屋で40年間、一人暮らしを続けていた。

東京都で生まれた男性は7人きょうだいの四男。中学を卒業後、高度成長期の集団就職の波に乗って上京し、独身のままイベント会場を設営する会社で勤め上げた。定年退職した後は、気ままな年金暮らし。弟(72)ら東京にいる親類とも行き来があったという。数年前、病気で足を悪

くし、一人では出歩けなくなったことで周囲との接点を失っていった。弟は「部屋が汚いから入らないでくれ」と言うので親族も会いに行く頻度がだんだんと減っていった」と話す。

遺族は荒れ果てた部屋の現状回復と遺品の整理に困り、専門の業者へ依頼。10月初旬、遺品整理業「キーパズ」(東京・大田)の作業員4人が片付け作業にあたった。作業員とともに部屋へ入ると鼻をついたのは強い臭気。部屋に散らばった昆虫の死骸とカーペットにできた黒いシミが発見までの時の経過を物語る。空き缶や読んだ形跡

がない新聞が積み重な約10冊のアルバムが出てきた。「こんなにきれいな状態で残っているのが予想される。

約5時間で清掃が終わり、男性の死の痕跡は消えた。遺族は帰る際、「孤立死が増えているとは耳にしていたが、まさか身内がそうなるとはね」とつぶやいた。

「孤立死」や「孤独死」に厳密な定義はない。東

京都市監察医務院によると、2017年に東京23区内の自宅一人でなくなった65歳以上の人数は約3300人で、10年前は誰にとっても身近な問題から約4割増えた。未婚

率の上昇を踏まえれば、今後増加していくことが予想される。

キーパズが全国で引き受ける遺品整理は年間約1800件。40〜50代の孤立死現場も少なくな

いという。吉田太一社長は「孤立死のリスクはど

んど高まるだろう。他人事として捉えないでほしい」と話す。

今、身の回りにいる友人や家族たちが、年を取

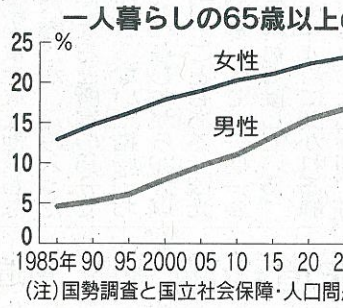
り、死を迎えるその時

そばにいてくれるだろう

か。人と人の結びつきが薄れた現代社会。孤立死

は誰にとっても身近な問題

になっている。



## 厚み増す単身高齢者

65歳以上の高齢者で一人暮らしをしている人の割合は1990年時点では男性が5.2%、女性が14.7%だった。それが2015年にはそれぞれ13.3%と21.1%に上昇。40年は男性20.8%、女性24.5%になると推計される。

孤立死を防ぐためには、日常的に身近な人と会話を交わすなど、社会と接点を持ち続けることが重要だ。内閣府の「平成30年版高齢社会白書」によると、単身で暮らす55歳以上の人のうち、家族や友人と「ほとんど毎日会話する」と答えたのは54.3%。一方で「週に1回以下」とした人も19.6%に上った。